

大病院の総合診療科とは

診療の「入り口」としての役割も

医療の場は三次救急の大病院から地域の総合病院、さらに僻地の診療所などさまざまです。臨床における総合診療を理解する場合、医師が少ない地域の医療における総合診療機能と、大きな病院の総合診療科の役割などに分けて考えるのがよさそうです。

本稿では、群馬大学医学部附属病院における総合診療科の位置づけ、臨床の方針などを確認することで総合診療の理解を深めます。

❖ 多角的に診療 ❖

医学の進歩に伴って専門化が進み、診療科が臓器・疾患別などに分かれるようになりました。群馬大学医学部附属病院(以下、附属病院)では、現在、いわゆる「内科」だけでも、循環器内科、呼吸器・アレルギー内科、消化器・肝臓内科、内分泌糖尿病内科、腎臓・リウマチ内科、血液内科、脳神経内科、腫瘍内科の8診療科があります。外科も臓器別に7診療科。これらを含め診療科は全部で31。

「総合診療科」はその一つです。医療が専門化、細分化するなかで、逆に、全人的に患者さんを捉え、特定の臓器、疾患に限定しないで多角的に診療を行うことも求められるようになりました。それを担うのが、専門分野としての「総合診療科」です。総合診療には、幅広く豊富な医療知識と正確な身体所見をとる技術が必要とします。

❖ 診療の「入り口」としての役割 ❖

附属病院総合診療科は、16歳以上を対象に、どの診療科に該当するのか分からない診断が困難な症状に対して診療にあたっています(表)。原因となる臓器が特定できず、社会的・心理的な要因も絡む健康上の悩みを解決するため、診療の「入り口」としての役割を果たしています。群馬大学医学部附属病院の機能を十分かつ効率的に発揮するため、他の専門診療科と密に連携しながら、患者さんの健康上の問題を広い視野から総合的に捉える全人的医療を実践するよう心がけております。

総合診療科の中に和漢診療部門を設けており、東洋

医学(漢方)と西洋医学の融和を目指した医療を実践しています。

❖ 臨床、研究、教育は一体 ❖

臨床と研究、医学生の教育は一体です。附属病院総合診療科と連動しているのが大学院医学系研究科総合医療学講座です。同講座は1999年に設置された群馬大学医学部附属病院総合診療部を前身として、その教育面での重要性が認められ、2010年に大学院の正式講座として認可されました。

教育面では、臨床実習生に対し、主に初期診療における医療面接と臨床推論、全人的医療の実地指導を行っています。

群馬大学医学部附属病院 総合診療科の主な対象疾患

【主な対象疾患】

総合診療科

- ・原因不明の発熱、原因がわからない痛み、しびれ、むくみ、めまい、倦怠感、咳、検査値異常、等々、さまざまな悩みに対して、総合的に診療を行っております。院内の他の専門科と相談しながら診療を行うこともあります。
- ・新型コロナウイルス感染罹患後症状(後遺症)および、新型コロナワクチン副反応についても診療を行っております。

総合診療科(和漢診療部門)

- ・西洋医学の診断で異常がないと言われるが体調がすぐれない方(虚弱、冷え性、倦怠感など)
- ・西洋医学の治療の補助治療として(アレルギー性疾患、癌、消化器・呼吸器疾患など)
- ・女性の性周期に関連する体調不良(月経困難症、月経前症候群など)